

第68回 滋賀県人権教育研究会レポート

第4分科会（人権確立をめざす保育・教育の創造）

「生きづらさ」の中を生きる若者たち

あいとうふくしモール運営委員会

若者の居場所 OMUSUBI

島村 恒平

1. 若者支援の「支援」ってこれでいいのだろうか（きっかけ）

若者の居場所 OMUSUBI では、ひきこもりや地域で孤立している若者たちが日常的に通える場づくりを行っています。私は10年前に関東から滋賀に転居しましたが、その前も同じようにひきこもり経験のある若者たちの支援をしている NPO 団体に働いていました。若者支援は全国でさまざまな支援が展開されていますが、その支援の多くが「相談窓口」と「就労支援」です。

就労支援は名前のとおり若者たちの「働きたい」を応援する、その方にあった働き方をいっしょに探す支援です。そういった支援を受けて若者たち就職先をみつけていくのですが、すべての人が安心してその後も働き続けられるような働き方に出会えるわけではありません。むしろ「生きづらさ」を感じている若者たちが選べる仕事は、アルバイトのような不安定な働き方しか選べないことの方が多いです。過去に職場で心身ともにボロボロになって自宅にひきこもっていた若者たちをまた同じところに送り出すような支援にこれでいいのだろうかという違和感を感じていました。

2. 「働きたい」からつながる地域の居場所

近年の若者の「生きづらさ」には多種多様なものがあります。OMUSUBI にくる若者もみんなそれぞれです。長くひきこもっていたり、学校にいていかなかったり。人と関わるのは苦手、でもずっとひとりでいるのもつらかったり。発達障害、精神疾患、支援にはつながっているけど他に行ける場所がない方。

背景はひとそれぞれですが、表出しやすいニーズのひとつに「働きたい（働かなきゃいけない）」という思いがあります。

OMUSUBI では「あいとうむすび」というおにぎり屋を運営していて、その中での仕事を「はたらく体験」として若者の受け入れを行っています。最初は指示されたことを黙々とこなしている若者たちですが、半年、一年といっしょにおにぎりをつくっていくうちにだんだん気持ちもほぐれていきます。ある時、おにぎりの作業後にスタッフと雑談をする中でスマホゲームをみんなでやってみようということになりました。それまで雑談などほとんどせずに黙って作業をこなしていたAさんが、そのスマホゲームの話になった途端せきを切ったように話しはじめてくれました。「働きたい」という思いでつながってくれたAでしたが、Aさんとの関わりを通して「働きたい」という思いもあるけれど、もっと友達とおしゃべりしたり遊んだりできる場所がほしいと思っているのだと感じました。

3. 若者が思いを語れる場所「ちゃむちゃむ」

おにぎりの作業だけではお互いのことを話す機会がなかったり、「働きたい」以外のニーズがみえてこなかったりするので、月に一回若者たちと語る会をはじめることになりました。「生きづらさ」や「し

んどさ」をテーマにあげて、若者たちがこれまでの経験したことや思いをお互いに語り合いました。

「自分だけがダメなんだ」と思っていたようなことも言葉にして語ってみると意外とみんな共感してくれたり、なんだかもやもやした思いも誰かの話を聞いてみたら、もやもやして言葉にならなかった思いに「あ、自分も同じことで悩んでいた」と気づくことができたという場面がたくさん生まれました。

その後、語る会で出会った若者同士で仲良くなり、OMUSUBI を通さず自分たちでカラオケや水族館に遊びに行くような仲間関係ができたりもしました。若者が感じている孤立感、これを払拭するためには、どんな支援よりも、おなじような思いの仲間と出会えることのほうが本人たちにとっては支えになることがわかりました。

その語る会の中で印象的だった言葉がひとつあります。「働くことってどんなイメージ？」というテーマでしゃべっていた時に、ある若者が「働くことは、刑務所にはいるのとおなじ」と語ってくれました。よくよく聞くと、その若者にとっては働くこととは「自分の思いは押し殺して、ただただ会社の言う通りに動く、失敗してもだれも助けてくれないすべて自分ひとりでがんばらなければいけない」ということを語ってくれました。それに共感する若者も多くいました。冒頭でも書いたとおり、若者支援の大部分を占めるものが「就労支援」です。これ自体はとても大切な支援だと思うのですが、「就労」だけを指向する支援では苦しくなる若者もたくさんいます。「刑務所に入るのと同じ…」と語ってくれる若者に「頑張って働こう！」とは言えません。働くこと、生きていくことに展望をもてない若者に就労支援はできません。それよりももっと大前提となる、この社会で生きていっていいんだと思えるような社会への信頼、自分ひとりだけではないと思えるような仲間、そういうものを獲得できるような場所や機会が必要です。

4. 支援からつながる居場所ではなく、だれでも通える居場所へ

いまの OMUSUBI に通う若者の多くは相談窓口から紹介されてきます。支援につながっても、相談は月に1回だけで、その他の日は家で一人ぼっちで過ごしている。「ひとりでいるとしんどくなる」という若者たちがたくさんいます。朝起きて、行くところがない、やることがない自分に直面すると気持ちが鬱屈としていきます。仕事をやめたら、学校をやめたら、若者は地域に行く場所がなくなってしまう。外に出られない若者もいますが、外に出たいのに行く場所がない若者たちもいます。

それから支援につながるということは、もうだれにも頼れなくなって、ひとりではどうにもならなくなってしまった状態にまでならないと支援にはつながりません。そこまでの状態になるにはとても時間がかかるし、またそこから立ち直るにはそれ以上の時間がかかってしまいます。「困った」からつながる居場所だけではなく、ちょっとしんどい時でも繋がれるような地域の居場所が必要だと感じています。それは「支援」というような福祉的なケアによる関わりでくるのではなく、本人の興味関心からつながりその人の世界がひろがっていくような教育的な関わりのできる場所が必要です。家庭、学校、企業から排除された若者たちは、かれらが学び成長する機会も奪われてきているからです。

所属を失った時に若者たちはあつという間に孤立します。居場所がないということは、それは地域で生きていく場所がないということと同じことです。若者がどんな状態にあっても、若者の学びや育ちを保障できる場所、この場所にいけば仲間に出会えたり・活動できたりする居場所。ここがあれば生きていけるかなと思えるような居場所が必要です。